日本聖公会 神戸教区報
神のおとずれ
2015年 3月号

発行所
神戸教区事務所
TEL 078(351)5469
FAX 078(382)1095
http://www.nskk.org/kobe/

発行責任者
司祭 芳我秀一

印刷所
文明堂印刷所

行動することで何かが生まれてくる

司祭 マルコ 平野一郎

倉敷ほっこりカフェ

倉敷聖クリストファー教会では、昨年の4月から宣教の一環として、福島県小名浜の聖テモテ支援センターが行っている「ほっこりカフェ」を参考にした、倉敷での「ほっこりカフェ」を開催することにしました。

倉敷のほっこりカフェは、教会と地域との関わり、地域に住む人々との繋がり、風通しの良い教会、開かれた教会ということを目指して、教会集会室にて無料のカフェを開くことにしました。

まず、昨年の4月1日（火）13時半～15時にほっこりカフェをオープンすることを決め、そのために約2ヶ月前に中型・大型の看板と案内チラシを作成しました。そして、約1ヶ月前には教会近隣に案内チラシを配布し、教会敷地内に2つの看板を設置しました。

カフェ・オープン

倉敷聖クリストファー教会として、初めて、このようなカフェの試みをすることもあって、当日、地域の方が集まってくださるか、不安もありましたが、蓋を開けてみると、来会者12名、教会の信徒のスタッフ4名、合計16名の大勢の方の出席がありました。

第2回目の4月9日（水）より、毎週水曜日（祝日、盆、正月等は休み）14時半～16時に開催しており、1月末現在で来会者4・7名、スタッフ4・9名の合計9・6名の平均出席となっています。

目標

私たちは、ほっこりカフェの目標として、以下のように設定しました。

短期
雑談形式で交流。

中期
出席者の意向をくんだ講話（健康、防犯等）、悩み相談などを企画。

長期
雑談を通して、近隣地域が求めているニーズに応答する。教会との関連付けを企画。

多くの効果

オープンして、約9ヶ月経ち、現在、短期目標の雑談形式で交流していますが、うれしいことがありました。

それはほっこりカフェに出席された未信徒の中に、日曜日の礼拝やクリスマスやイースターに出席された方がおられたことです。

さらに未信徒の来会者の中に、キリスト教やキリスト教人生観の話を聞きたいとの要望があり、そこで毎月1回ほっこりカフェ後（15時以降）に、第2部「幸せに生きるためには―キリスト教的人生観」という講話（対話形式）を開催することになりました。

この第2部も未信徒の来会者の出席率は高く、皆さんが人生や幸せについて、大きな関心を持っておられることがよくわかります。

また、教会信徒がスタッフとして関わっていますが、毎週、開催することにより、信徒同士の交流がより深くなりました。

行動を起こすことで

もちろん、課題や問題がないわけではありません。現在の課題として挙げられるのは、

1．メンバーが固定化しつつある。マンネリ化を解消。
2．一度、来られた方がほとんど来られない。リピーターの確保。
3．来会者の出席の拡大、拡充。
4．隣り近所の方が来られていない。近隣の方が気楽に来られるような方策の模索。

課題は多くありますが、今回のほっこりカフェを開催するにあたり、一つの行動を起こすと、連動するように何かが新しく生まれ、広がっていくことがわかりました。このように教会とは課題に対して何かの行動を起こし、何かに取り組むと、また新しい何かが生まれ、発展していくものなのではないでしょうか。

今後も、私たちは失敗しても、また次の行動を起こし、キリストの体である教会として、神の宣教の御業に参与し続けていきたいと思います。

（倉敷聖クリストファー教会・福山諸聖徒教会管理牧師）

阪神淡路大震災から20年を迎えて

20年目の祈り

リベカ　蔭山　陽子

阪神淡路大震災から20年、神戸聖ヨハネ教会で教区主催の記念聖餐式が行われました。教区内外から多数の教役者・信徒が遠くは東京からも駆けつけて下さり、前日の16日には前夜会として当時の中村司祭（現神戸教区主教）ご一家やボランティアの皆様をお招きし、皆でお鍋を囲みながら、震災当時のあの混乱した状況の中での日々を思い出し、語らいはいつまでも続きました。

翌17日の記念聖餐式には80余名の方々がお集まりくださり、礼拝堂の赤い椅子を埋めつくしました。

奨励は当時ボランティア活動を長期間された東京聖マリア教会信徒の宮田裕三兄でした。宮田兄は「その時の為に準備して待つ…災害の経験を活かして備えて待つ、備えられた教会でいられるよう、日々祈り続けましょう」と語られました。

20年という大きな節目を振り返るとさまざまな思いが胸をよぎります。あの未曾有の状況の中での中村司祭と道子夫人の被災者への愛。それまで教会の内側ばかり見ていた私にとって、それは震度７に匹敵する程でした。寝食を忘れて来る日も来る日も心を込めて被災者を支えるその姿には優しさと温かさが溢れていました。「あー、これが教会の姿なんだ」と私は得がたい学びを忘れる事ができません。

幸い私の教会のつながりでは亡くなられた方はいませんでしたが、長田区内の保育所勤務の際、受け持った男の子一家五人が亡くなりました。東遊園地・モニュメントの銘板の前で祈る時、私を慕っていた幼い、可愛い笑顔が目に浮かび、深い悲しみは消える事がありません。

私達は６４３４名ものかけがえのない命を失いました。夢を持ち、希望の未来を描いていた筈です。今、生かされ、命ある者として伝えてゆかねばならない事があります。それは絆の大切さ、地域とのつながり、震災への日々の備えです。そして、私達には祈りがあります。小さな祈りからやがて自分を何かの為に捧げようとする行いが生まれるでしょう。

震災で失われた多くの尊い魂が安らかに憩われますよう心から祈りつつ。主に感謝

（神戸聖ヨハネ教会信徒）

〝解き放て、いのちで笑え！〟

ハンナ　垰田　恵里

阪神淡路大震災から20年、１月17日（土）午後２時より、神戸聖ヨハネ教会では『忘れない１・17ヨハネＹＯＳＥＮＡＢＥコンサート』が開かれました。このコンサートは「阪神淡路大震災を伝えていく。そして今、困難のうちにある方々を思い、心に留める。」という目的で２０１３年に始まりました。「出演者もお客さんも『寄せ鍋』の具となり、心暖まるひとときを過ごしたい」という思いを込め、こんな名前になっています。入口では鍋に見立てた募金箱にお気持ちを入れて頂き、自然災害などによる被害を受けた方々のためにお捧げします。

幕開けは、ヨハネ教会名物「St. John's gospellers」による賛美。日頃からのチームワークで本番に強いのが売りです。ママゴスペルクワイヤー「Grace」は、迫力ある歌声を礼拝堂一杯に響かせてくれました。リコーダーとウクレレの音色が優しく心に染みるステージを届けてくれたのは「リコレレＳＰ」。「ミカエラーズと仲間たち」の面々は、震災を機に生まれた名曲「満月の夕」他を演奏しました。

第２部では、今回の募金先である福島県の磯山聖ヨハネ教会（東北教区）について坪井執事にお話し頂きました。続いて、伊丹への愛あふれる「ツキサケ」で大いに盛り上がった後は、ギター＆ピアノデュオの「sorano」と「AKIKO」によるステージ。じっくり歌に聴き入りました。最後に「しあわせ運べるように」を全員で歌い、幕を閉じました。

あの日から20年。出演者のみなさんは思いを込めて「今、伝えたい歌」を持ち寄ってくれました。音楽を通し、生かされていることへの感謝を分かち合えた時間となりました。

〔題は「満月の夕」歌詞より〕

（神戸聖ヨハネ教会信徒）

兵庫県基督教連合会主催

阪神・淡路大震災20年記念礼拝

セバスチャン　浪花　朋久
聖職候補生

1月11日（日）15時から、兵庫県基督教連合会主催の阪神・淡路大震災20年記念礼拝が、神戸聖ミカエル大聖堂で行われた。礼拝参加者は約260名。礼拝は聖公会関係学校である松蔭中学・高校の放送部の生徒たちが司会を行い、同校のコーラス部によるJ・W・ツィーグラー編曲「アベ・マリア（阪神大震災で亡くなった方々のための祈りとして）」や阪神・淡路大震災記念礼拝聖歌隊、アンサンブル・ヴォックス・フマーナなどによって歌の賛美がささげられた。

説教者は、日本基督教団の北村宗次牧師。北村牧師は、説教の中で、阪神・淡路大震災当日、朝目が覚めて支度しようとしたとき、地鳴りと共に家の中が激しく揺れ、揺れがおさまると窓から見えるはずの教会の塔が見えないことに驚き、教会に向かうと、そこには教会の煉瓦が崩れ落ち、近くの道路まで煉瓦が広がっていたこと、などを話された。また、お話として、福祉ネットワーク西須磨だんらんの理事長である日埜昭子氏（神戸聖ミカエル教会信徒）から、現在の活動が阪神・淡路大震災復興のまちづくりの活動の中から生まれ、「困った時はお互いさま」の精神に基づき誰もが安心して最後まで暮らせる福祉コミュニティづくりに取組んでいることが話された。

礼拝中には、とりなしの祈りとして「震災の祈り」が今年で20歳を迎える関西学院大学神学部の学生たちによってささげられ、兵庫県基督教連合会副会長の相浦和生牧師の祝祷をもって、礼拝が閉じられた。

超教派のつどい

アナスタシア
高橋　絵里

1月18日、神戸聖ミカエル教会で、超教派青年のつどい「新年鍋の会」が開催されました。

超教派青年のつどいは、神戸にあるカトリック、日本キリスト教団、聖公会、バプテスト教会などの、クリスチャンの青年で構成されています。2008年の市民クリスマスをきっかけに、同年代の他教派の方々と、交わりをもちたいという趣旨で誕生し、お花見やバーベキューなど、年に数回、交流会を行っています。

「新年鍋の会」は、今年で3回目を迎える恒例行事です。今回の参加者は38名、聖公会からは8名が参加しました。会は、浪花聖職候補生司式による夕の礼拝と鍋会の二部構成で行われました。礼拝では、教区招聘オルガニストの井原姉による、素晴らしい奏楽を堪能しました。急な依頼にも関わらず、会の趣旨に賛同頂き、引き受けて下さった井原姉にこの場をお借りして感謝申し上げます。

さて、この鍋会は、初対面の他教派の方々とより早く打ち解けて頂く為に、一風変わった内容になっています。それは数種類のスープ、具材、締めを各グループで奪い合うドラフト形式で行われる点です。互いの好き嫌いを話し合い、決まったスープを元に次にどの具材を狙っていくか作戦を立てる、そして、勝ち取った具材を皆で調理する…こういった過程を経て、お鍋を頂く頃には、すっかり仲間意識が芽生えています。普段は別の教会で活動している私達ですが、共に祈り、食事をし、語り合う事で、同じクリスチャンの仲間である事を感じる事が出来ました。

ご興味をお持ちの方は、kyouhagoe@gmail.comにメールを頂きましたらご案内をさせて頂きます。次回は夏にバーベキューを開催予定です。

（神戸聖ミカエル教会信徒）

今年度新任教区諸委員

■常置委員会
（委員長）司祭 上原信幸
司祭 八代　智（書記）
司祭 小林尚明、大東正人
橋口　満、松田嘉彦

■聖職候補生養成委員会
（委員長）司祭 瀬山公一
司祭 八代　智、司祭 中原康貴
執事 池澤隆輝、上野良雄
芝　雅子、宮永好章
荒木恵子

■宣教委員会
（委員長）司祭 小林尚明
司祭 瀬山会治、上野良雄
佐賀有道、多井　剛
谷　睦子、土井禮子
弘井宗子

■パイプオルガン委員会
（委員長）原田里香子
司祭 上原信幸、井原由紀
江見龍太郎、幣原映智
大東正人、福島　薫

■教区審判廷審判員
司祭 上原信幸、司祭 小南　晃
司祭 芳我秀一、飯田恵二
酒谷寛子、東郁弘子

■会計監査委員
田中章喜、佐々木稔忠

■チャプレン
教区婦人会　司祭 瀬山会治
中高生大会　司祭 長田吉史
青年交流会　執事 杉野達也

■伝道区長
（神　戸）司祭 原田佳城
（瀬戸内）司祭 角瀬克己
（広　島）司祭 竹内　宗
（山　陰）司祭 瀬山会治
（徳　島）司祭 瀬山公一
（西四国）司祭 柳本博人

鳩だより《敬称略》

祝洗礼

12月25日（木）
テレジア　奥田純子
広島復活教会

モニカ　石橋カズ子
高知聖パウロ教会

1月4日（日）
シャロム　古林結寿
ノア　ケント　チュア
神戸聖ミカエル教会

ご逝去

12月30日（火）
ヨセフ　長崎章
高知聖パウロ教会

1月9日（金）
リベカ　佐治朝子
姫路顕栄教会

1月18日（日）
パウロ　平峯元隆
神戸聖ミカエル教会

1月20日（火）
マリヤ　湯村清子
富岡キリスト教会

教籍移動

1月15日（木）
オーガスチン
安藤正義
神戸聖ミカエル教会より
金沢聖ヨハネ教会へ

1月27日（土）
シモーヌ　福井貴子
名古屋聖マルコ教会より
神戸聖ミカエル教会へ

広島伝道区

1月10日（土）、伝道区会が徳山聖マリア教会を会場に行われた。

また、この日は、徳山聖マリア教会の会館解体前の感謝聖餐式も併せて行われ、中村主教をはじめ、歴代の教役者も集まり、たくさんの方々と伝道区会の報告・協議の後、新年会・感謝会を囲み、閉会となった。

4月の教区関係教役者　逝去記念聖餐式

日時　2015年４月２日（木）午前10：30
場所　神戸聖ミカエル大聖堂
司式　主教　中村　豊
説教　司祭　小南　晃

＊４月の記念逝去教役者＊

1日	執事	パウロ	中村四朗
2日	司祭	パウロ	鈴木尚夫
2日	司祭	ヨハネ	小南弘ゑ
5日	伝道師		岡井ち
7日	伝道師		億川八郎
11日	司祭	パウロ	広瀬吉興
11日	宣教師	メアリー	サンダー
13日	伝道師		井上トヨ
13日	司祭		荒砥琢哉
15日	司祭		山内豊吉
15日	司祭	ペテロ	小池耕造
15日	司祭	ジョン	マクドナルド
16日	伝道師		鶴野瑛治
17日	司祭		堀六郎
19日	司祭	ジョージ	ストロング
19日	伝道師		高山ゆき
22日	司祭	トマス	入交源治
23日	司祭		村田里
23日	伝道師	マリア・マグダレン	神崎幸子
25日	司祭	ヨハネ	瀬山岩雄
28日	主教	ジョン	シンプソン
28日	主教	ジョン	マ

青年交流会のご案内

日　　時：３月27日（金）～29日（日）
場　　所：松江基督教会
内　　容：新青年の歓迎と教会内外の清掃
申込締切：３月４日（水）

＊申込先など、詳しくは各教会に配布している案内をご覧ください。

お詫びと訂正

『神のおとずれ１・２月号』に掲載した堅信50年顕彰者の田中千恵子さん（浜田）のお名前が千穂子となっていました。また、吉田静子さん（明石）は顕彰者ではありませんでした。お詫びし訂正いたします。

記憶の癒し

マイケル・ラプスレー著
西原廉太 監修
吉谷かおる・榊原芙美子 訳
聖公会出版　３０００円＋税

司祭　アシジのフランシス
西原　廉太

本書の著者、マイケル・ラプスレー司祭は、ニュージーランド出身の聖公会・聖使修士会（SSM）に属する司祭で、1973年に南アフリカに派遣されました。

未だ、アパルトヘイトが残る南アフリカで、彼は、南アフリカ聖公会大主教、デズモンド・ツツらと共に、アパルトヘイト撤廃運動に献身します。1990年、ネルソン・マンデラが、27年間の投獄の後に釈放された同年4月、ラプスレー司祭のもとに送りつけられた雑誌に隠し挟まれていた手紙爆弾が爆発しました。その時、彼は、両手と片方の眼を失いました。耳の鼓膜も傷つきました。想像を絶する痛みの中で、神が共にいてくださるのを感じていたといいます。

ラプスレー司祭は一昨年釜山で開催されたWCC総会閉会礼拝で、こう証しされています。

「みなさんの祈り、みなさんの愛は、神さまが、爆弾によって傷ついた私が贖われるのを助ける道具であったのです。それは、死から〈いのち〉を、邪悪なものから善なるものを救い出してくれました。病院で、残りの人生をずっと障がいと共に生きなければならないことを自覚した時に、私は、かつて見たあるイコンを思い出していました。そのイコンとは、片足が、もう一方の足よりも短いキリストを描いたものです。そのイコンは、イザヤ書の『救い主が、その姿を損なわれ、人とは見えず、もはや人の子の面影はなく、軽蔑され、人々に見捨てられる』というところから取られています。」

本書は、ラプスレー司祭の苦闘と献身の記録であると同時に、壮絶なまでの信仰の証しでもあります。ぜひご一読ください。

（立教大学副総長、中部教区司祭）